

つがるの昔っこ (昔話) 13

化け物寺(猿) (標準語)



国土交通省 東北地方整備局
岩木川ダム統合管理事務所
イラスト：やざわ ゆな
カラーリング：つしま けいこ



昔、ある村の東の山に、山寺がありました。その寺はどんなに良い和尚様が来ても、十日も住めば居なくなってしまいました。村の人達が困っている所に托鉢してきた和尚様が居ました。

こりゃあいいあんばいだ と思った村の庄屋様が、『和尚様、和尚様、まあ、あがってください』

って、家にあげて、ご飯を炊いて食べさせ、『実は折り入ってお願いがあります』って言いました。和尚様は『何ですか、改まって?』

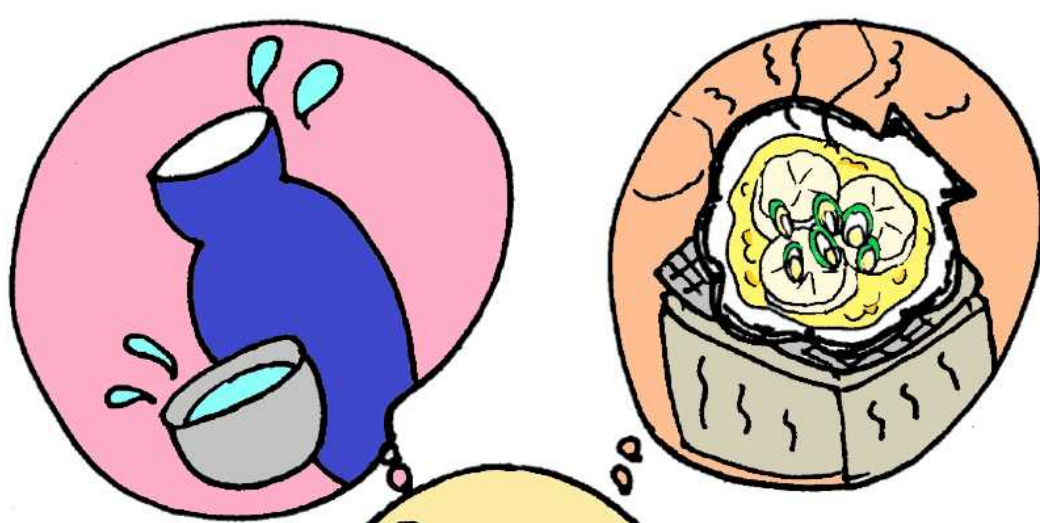


『ん、他にもないが、実はうちの村の東山にあるお寺があるんだが、今、和尚様が居ないので、お前様に何とかあの寺の住職になってもらえないですか』って頼みました。

和尚は、びっくりよろこんで、『あら、有り難いなあ、私みたいな乞食坊主を住職にしてもらえると。良いですよ。私は早速その寺に行きます』と、引き受けました。

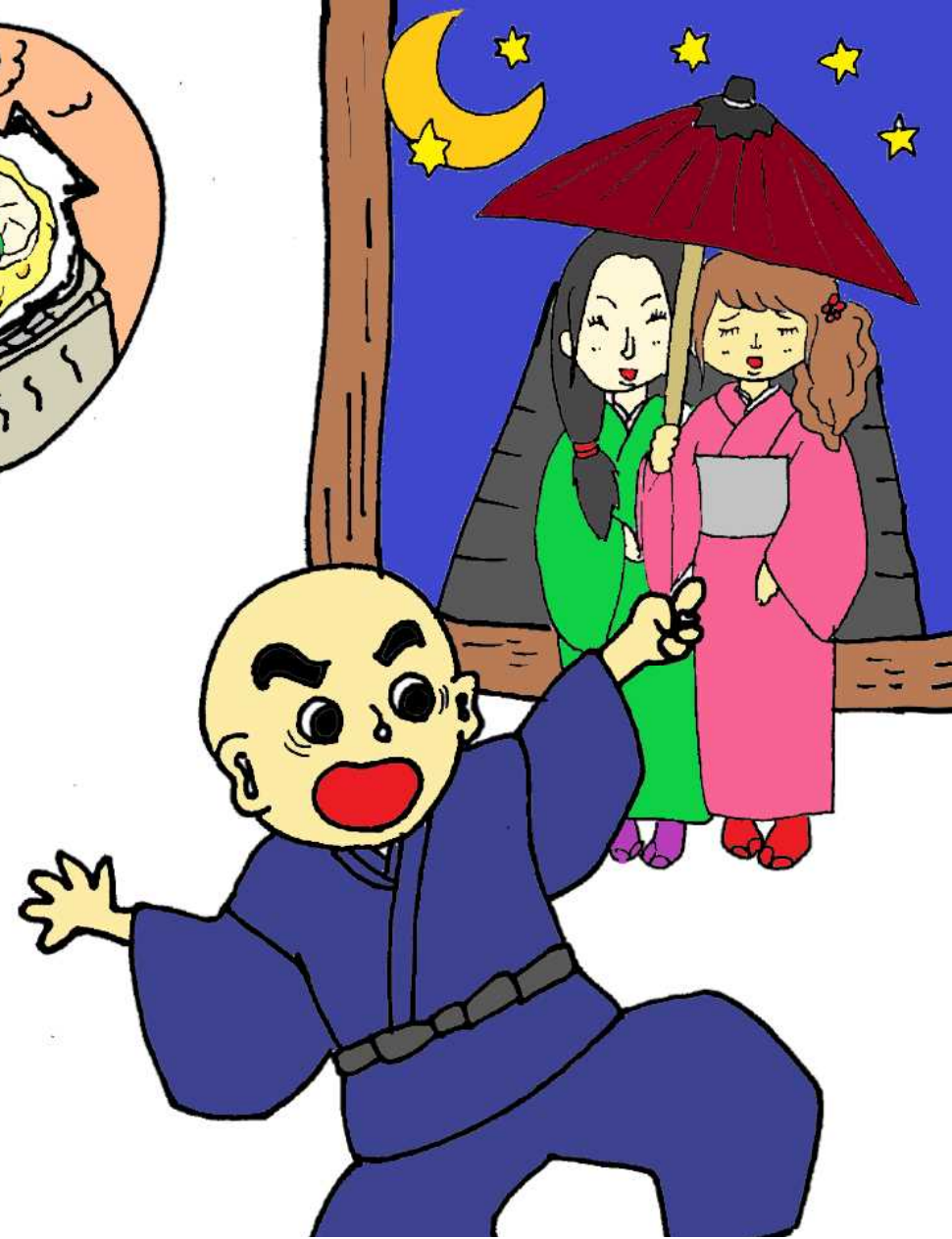


さあ、和尚さん、寺に行って掃除もして、夜になったので、



『ふう、今日は働いたなあ。疲れたから寝る前に、酒を一杯飲んでから寝るかな』って、庄屋様から貰ってきた肴と酒で酒盛りをしていました。だいぶ夜も更けた頃、寺の門の方から、カランコロンと下駄の音が聞こえてきました。

『わい、この夜更けに、この山中の寺に来たのは誰だろう』と、ふっと見たら、唐傘をさした綺麗な若い娘が二人居て、スッと本堂に上がってきて、和尚のそばまで来て、『私たち、下の村の者ですが、今日からこの寺に新しい和尚様が来ると聞いたので、始めは淋しいだろうと思い、和尚様に私たちの歌を聴いて貰い、踊りも見て貰おうと思って来ました。さあ、まずは、おひとつどうぞ』とお酌をしました。



娘二人は、代わる代わる歌をうたったり、踊りを踊って見せました。『地震、雷 おっかなくないが、土佐の高知の鬼犬おっかない、あらー、おっかないよー、おっかない』と、歌いました。夜中歌って、踊って、夜明けに戻って行きました。そして次の晩も、又その次の晩も何回も来て『地震、雷 おっかなくないが、土佐の高知の鬼犬おっかない、あらー、おっかないよー、おっかない』と、歌って、踊って、夜明けに戻るのだそうです。



和尚は、何だかこれはおかしいなと思いました。『新しい和尚が来たからといって、こんなに毎晩、毎晩、酒を飲ませて、歌や踊りをみせるものか、始めはおもしろかったが、何だか怪しいな、ひょっとして、あの女達は妖怪変化かな?』と思い、その晩は眠らないで考えました。



次の日の昼に庄屋様の所に行って、
『庄屋様、庄屋様、私はどうしてもやら
なければならぬ用事が出来ました。つ
いては、旅にでなければなりませんので、
何とか少し、暇をください』
『旅に？どこまで？』
『あい、土佐の高知まで』
『土佐の高知？あんなに遠くまでですか。
必ず戻ってきてください。』って、餞別
をもたせました。

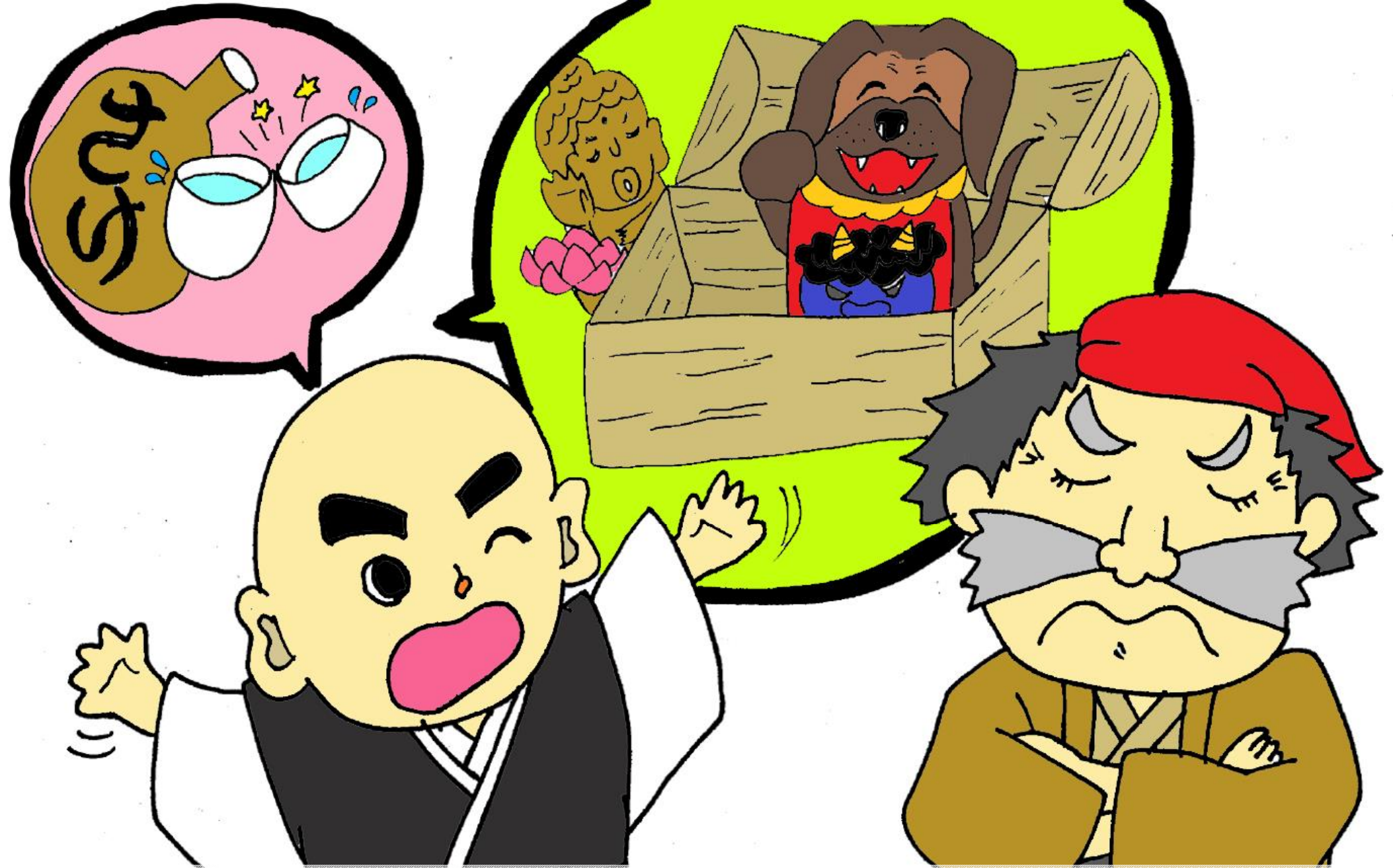
さて、和尚さん、長い旅をして、はるばる土佐の高知までやってきました。
茶店に入って休んでいた時に、『このあたりに、鬼犬という犬は居ますか？』と聞いたところ、茶店の婆様が『ああ、鬼犬でやんすか。鬼犬ならほれ、そのすぐ先の、角の豆腐屋さんの犬でやんす。』と、教えて貰いました。



豆腐屋に行ってみたら、店の前に立派な体格をした大きな犬がでんと座っていました。



和尚様は飼い主の豆腐屋に涙を喋って、何とかその鬼犬をしばらく貸してくださいと頼みました。豆腐屋の主人はその犬を息子のように可愛がっていたので、始めは渋って、なかなか、ウンとは言いませんでしたが、はるばる北の国から長旅して来た和尚様のたつての頼みなので、とうとう断り切れず、鬼犬を貸してやりました。

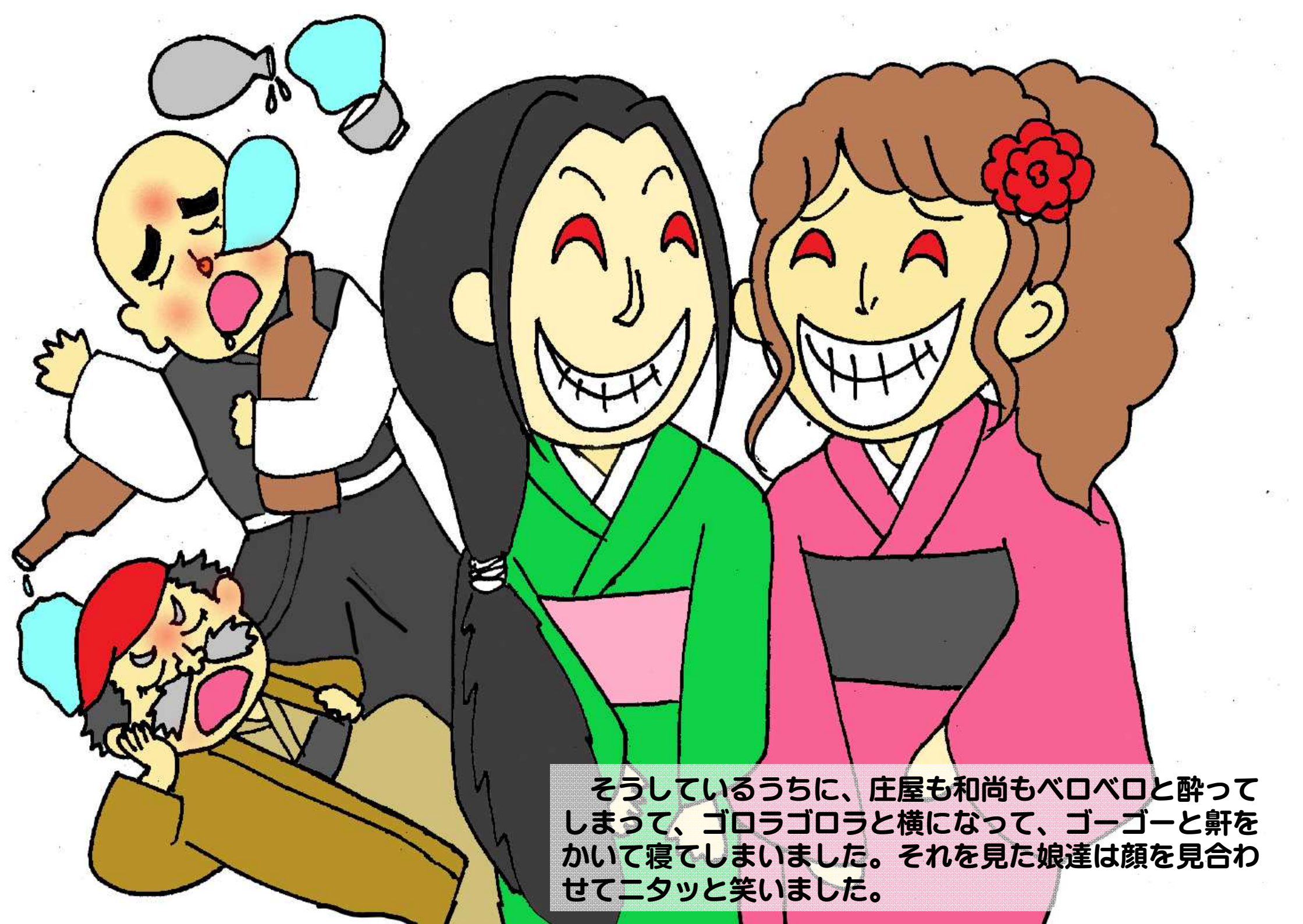


和尚は今度は鬼犬と長旅して津軽に戻ってきました。帰ってから庄屋様にこれまで起きた寺の様子を詳しく話しました。『そういう訳で私が土佐国まで行って、この鬼犬を借りてきたので、今夜は庄屋様も寺に来て、私と一緒に飲んでください』と言い、庄屋の家から大きな箱を運んで、その中に鬼犬を入れて、本堂の仏壇の陰に隠しておきました。

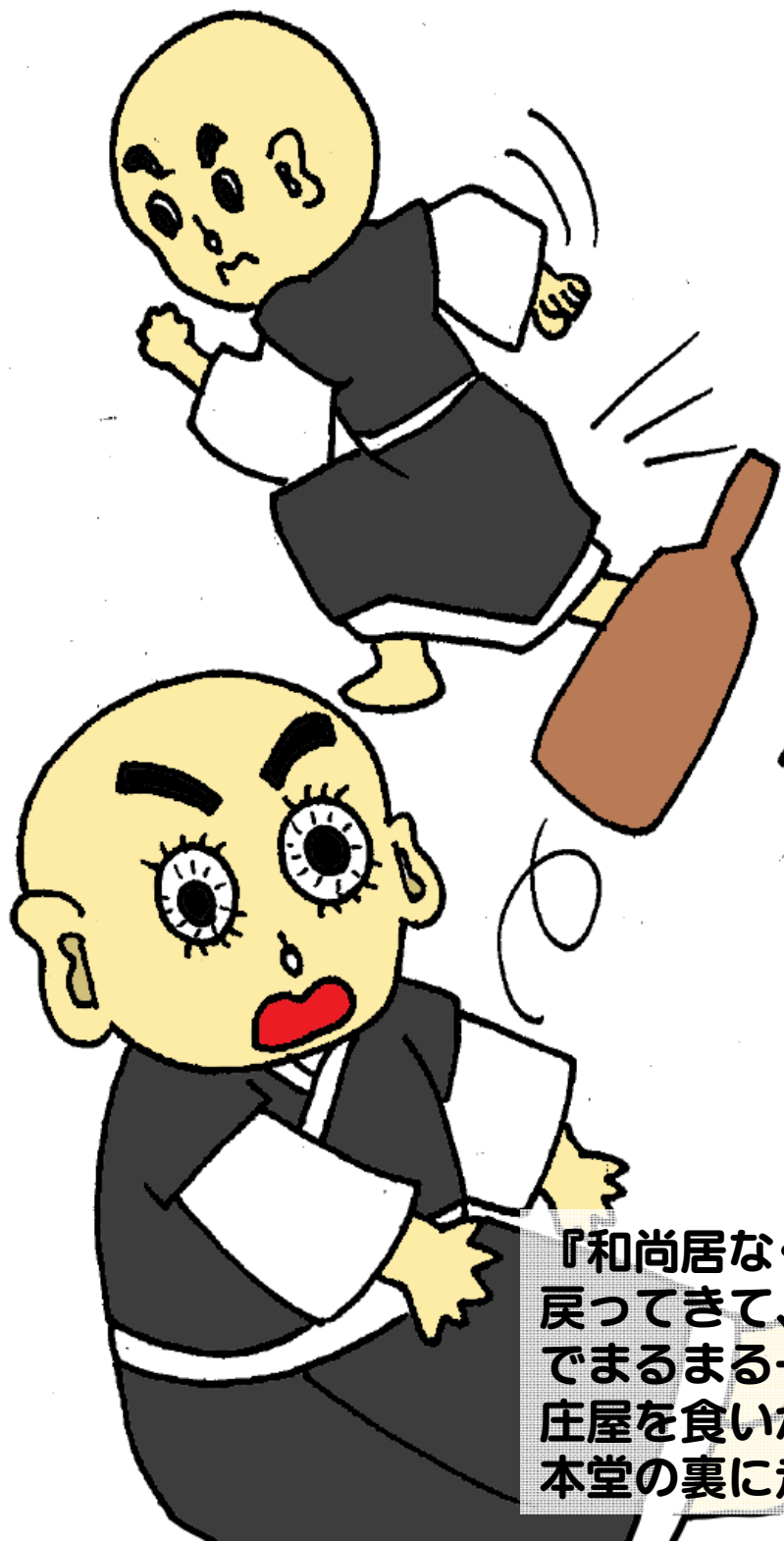


さあ、晩になりました。
和尚と庄屋が酒飲みを始め
たら、また、あの娘達が下
駄の音をカランコロんと、
唐傘かぶってやってきまし
た。

『あれえ和尚様、しばらくだねー、あれ、今日は庄屋様も一緒だね、そしたら又、賑やかにやるね、さあ、飲んで、飲んで』と、お酌をしました。庄屋様が、『今日は和尚様が長い旅から無事戻った祝いの酒だ、さあ、お前たちも飲め、飲め』と、娘達にも沢山飲ませました。



そうしているうちに、庄屋も和尚もベロベロと酔ってしまっ
て、ゴロラゴロラと横になって、ゴーゴーと鼾をかいて寝てしま
いました。それを見た娘達は顔を見合わせてニタツと笑いま
した。




『和尚居なくなって、残念なことになったと思っていたら、又こうして戻ってきて、今夜は庄屋も一緒だ。これは棚からぼた餅だ。今日は一人でまるまる一人ずつ食うべし、ヒヒヒヒ……。』と、娘達は和尚と庄屋を食いかかったその時、眠っているはずの和尚がガバツと起きて、本堂の裏に走って行って、バツと箱の蓋を開けました。



すると、鬼犬がダーツと飛び出してきて、二人の娘に次々に飛びかかり、喉笛をブチッ、ブチッと噛み切りました。血がドバーと吹いて、娘達は『ギャーアア』と叫び、見る見る顔つきが変わり、そこに倒れました。そうしたら、その二人は年とった猿の化け物でした。

次の日の朝、村中の者を集め、寺をきれいに掃除して、床下を見たら、二匹の化け物が寺に泊まった人を食った、たくさんの骨がザックザックと出てきました。





昔から人も獣もみんなお互い住み分け合って暮らしてきた。この話は人間の住み家に入ってきて、人に悪さした猿の話です。しかし、今では人のほうが獣の住むところに、ズカズカと入って行って獣を次々に殺している。

獣から見たら、今だと人間の方が、この二匹の猿の化け物のようなものだろうな。 おしまい